

## RYOKO INOUE “The Ultimate Desire of Human Beings --- To Be Accepted について

久慈 要 (くじ かなめ)

国籍：日本 住所：東京都武蔵野市西久保

勤務先：東京都武蔵野市西久保 3 丁目 9 番 5 号 株式会社アイ・ブレイズ

役職：代表取締役 開発部 SE・コンサルタント

評点：－ 2

要約：他者によって受容されることが、人に安心感を与え、創造性発揮などを可能にする、といったことが書かれている。しかし、井上氏の書かれているものは、論文と呼べるのだろうか？ 書かれていることの内容に異議を唱える人は、あまり居ないかもしれないが、これは、筆者である井上氏の意図が分からない論文、いや、文章ではなかろうか？ これで、井上氏は、何を読み手に伝えたかったのか？ 論文、としての、書き手、井上氏、の思考の深さも、伝わってこないなので、評点は、最低にさせていただいた。

Abstract : In this Ms. Inoue's writings, it is said that to be accepted by others makes everyone at home and relaxed and also makes everyone to be creative or challenging or so. But I doubt that this writings can be called an article. The contents written will seldom be opposed, I think. Yet this is an article or writings with which the readers can't understand what Ms. Inoue wants to express. With all these sentences, what Ms. Inoue would like to say to the readers? I can't appreciate the extent or depth of thoughts of the writer, Ms. Inoue, so the estimation of this writings from me is the lowest.

所見：

井上氏の書かれたものは、最初は言葉の羅列で、徐々に文章になり、最後は、実験の紹介がある。全体の調子としては、他者によって受容されることが、人に安心感を与え、創造性発揮などを可能にする、といったことが書かれている。

ただ、これを論文と呼んでよいのか、躊躇が感じられる。「角の魚屋で、サンマを 3 匹 500 円で売っていた。」といったたぐいの言明が羅列されているよりは、心についての表現が並んでいるが、筋道立てて読み手に何かを伝えようという風には取れない。井上氏は、どういう意図で、これを書いたのか？

通常、論文は、何かを伝えるとか、説明するとか、主張するとかするために書かれる。しかるに井上氏の書かれたものの最初の部分は、文章にもなっておらず、まるでメモのよ

うであるし、徐々に文章になり、説明や論考らしきものが増えていって、実験の紹介まで載っているが、最後まで読んでも、執筆意図は何なのだろうと考えてしまう。

この文章を手掛かりに、自分の執筆意図を推理させたいとか、執筆した心境や背景心象を推測させたいとか、そういうことを井上氏は考えておられるのか？ つまりは、自分の考えていることを当てて欲しいというラブレターのようなものなのか？ 通常の意味では、これは論文ではなく、せいぜい、未完成稿とでもいうべきものであろう。

また、氏の論文要約を読んでも、すでに感じられるのであるが、終わりの方で、会社の中の雇用者、被雇用者、みたいな話が出てくるが、そのつながりが、唐突な感じがして、違和感を感じさせる。そこに何か井上氏のこだわり、執筆動機や主張に関わる部分があるのかもしれないが、今のところは、はっきりしない。確かに紹介されている実験は、職場で行なわれていて、会社の間関係の方が、一定の目的に沿った、はっきりした関係で、余計なものが入り込みにくいので、実験しやすいとは思いますが、そこまでの書き方は、個人の内面についての一人称的な書き方だったので、なぜ急に会社、職場の話になったのか、ちょっと驚いた。ここも説明がもう少し丁寧であれば、それほどの違和感なく、納得して読めるようになる可能性は十分あるので、そういう点でも、未完成稿の印象を強めている。

折角の機会だから、他者から受容されることについてもう少し考えてみよう。他者からの受容というのは、井上氏の言うように究極の欲求なのか、これも検討の余地はあると思う。井上氏は、個々人にとって重要だということは言っているようにも思えるが、あの文章の中で、究極の欲求、ということを実証しているわけではない。他者からの受容というのは、社会的な要素を含むので、直接生存につながっている欲求と比べると、究極の欲求なのかは、今一、論証が必要な気もしないではない。

しかし、確かに、他者から受容されると、心地よい。元気も出る。受容されると嫌だ、という人は、まず、無さそうである。逆に他者からの拒絶は、人を落ち込ませる。悩みや病気を作り出すことさえある。これは、ほとんど例外なくすべての人に当てはまるように感じられる。井上氏の書き方は、この、ほとんどすべての人に当てはまる、ということを利用して筆者には感じられたが、この、ほとんどすべての人に当てはまるということが、どういうことからきているのか、また、そのことのもたらすものは何か、などといったことをもう少し掘り下げて論じてくれれば、それは、それで、なかなか興味深い論考になったのではなかろうか。

また、臨床場面におけるクライアントと治療者の関係においても、治療者によるクライアントの受容が、非常に大きな役割を果たす。極端なことを言うと、受容し、傾聴するだけで、大きな治療効果があるように見える。この辺を掘り下げて論じるというのも、

また、意義ある作業で、良いのではないかと？ 井上氏は、一応、これに言及してはいるが...

「角の魚屋で、サンマ3匹500円で売っていた。」よりは、「あの大きさが00円なら、お買い得かもしれない。」の方が、心の動きを反映していて、「塩焼きして、大根おろしと醤油で食べるとこたえられない。」とか、「スダチがあるともっと良い。」とかの方が、さらに、心の問題に迫っているのかもしれない。井上氏の書かれていることは、それよりさらに、心の問題をはっきり論じているのだろうとも、思う。その意味では、サンマの塩焼きの話、を、繰り返し、様々な角度から論じたものよりも、この、心の諸問題研究会への投稿に適した内容を持っているのかもしれない。しかし、サンマの話も、論じ方次第では、ふさわしさを獲得することもあるようにも思う。そういう観点に立てば、井上氏には、サンマよりは、心の問題にふさわしい素材を扱っているのだから、もう少し、素材を料理してほしかった。

サンマになぞらえて言えば、井上氏の書かれたものは、焼きムラがあり、生焼け部分が目立つ。提供のされ方も、皿にきちんと載っているかも疑わしい。なのに、料理人は、良い素材を、ちょっと面白い料理法で出したのだから、味わって食べてほしいと言っているようにも感じられる。もう少し、素材の生かし方を深く検討して、おいしい味を引き出して、楽しく、おいしく、食べやすく、提供してほしかったように思う。

最後に、ちょっとイレギュラーだろうが、感想めいたことを書かせてもらいたい。

今回、査読を、と言われて、井上氏の「論文」を何度も読んだが、大変、つらかった。書いてあることは、査読すべき「論文」でないなら、ああ、そうだね、程度で済む、あまり、大きな反対をするようなことでもなさそうに思う。しかし、これが、「論文」です、と、言われると、困る。考えたことをまとめました、では、学生のレポートとしては、ありかもしれないが、論文にはならない。読み手に分かるように、自分の意図を説明し、納得してもらえるように、言葉を選んで、組み立てていく、それが論文というものだと思う。井上氏の書かれたものは、普通の評価では、「考察」が不足している。「愛って良いものですね。」と言われて、「いいや、そうは思わない。」というのは、ひねくれ者だろう。「人は、受容されると、気持ち良くて、安らぎますよね。」と言われて、反対する人は、あまりいないだろう。結構、みんなが、同意できるもののように私も思う。選んだ素材の力で、井上氏が書かれたものに対し、あまり、反対は出ないような気がするが、「論文」と言われて読むと、それで、だから、何が言いたいのか？ という気持ちが、筆者には起きてくる。

結局、論文を書く人に期待したいこととしては、対象となる主題を、どこまで深く考えてくれたのか、それをどこまで伝えてくれたのか、みたいなことではないかと？ それで、

井上氏の書かれたものでは、伝わってこない。素材の並べ方は、多少工夫したのかな、くらいで、あとは、安易に書かれているように見えてしまう。お湯を入れて、3分くらい、あとは、おいしく食べて、みたいな気分で書かれた論文なのかな、これは？ と言いたくなくなってしまいうくらいの戸惑いを感じてしまう。

でも、実際に、このテーマで、これだけ、ずらずら、言葉を並べるのは、そんなに安易にできることではない、とも、思う。と、すると、書いてないが、井上氏は、何をきっかけに、これを書こうと思ったのか、こういう素材を並べて、読み手に何を考えさせたかったのか、みたいなことも考えるが、そこまで読み込む必要があるのか。そこが、筆者が、「ラブレター？」という表現を使った理由である。そこまでお付き合いしなければならぬのか？ 推測すれば、失恋でもした？ 研究室で、邪険にされた？ みたいな推測だってできてしまいそう。しかし、論文で、そんなこと、読み手に推測させるのは、おかしいでしょう？ ともかく、通常なら、これを論文としては、**Accept** できないと思う。